



2023年2月16日（木）、KURKKU FIELDS 内に「地中図書館」がオープン

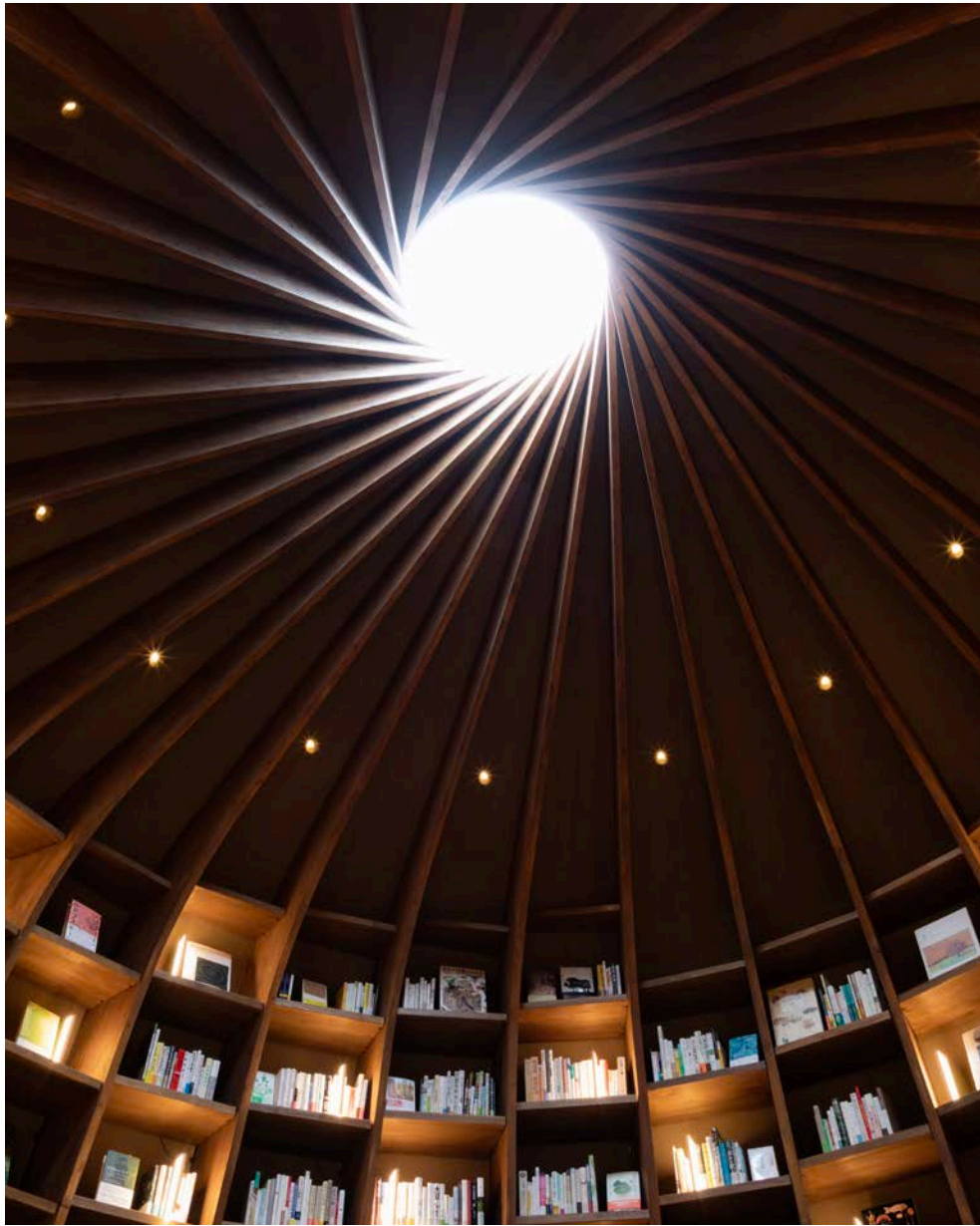
土の中の微生物から植物が豊かな栄養を受け取るように、
土の中に潜り込んで本を読み、知を蓄え、想像力を養い、そしてまた大地を踏みしめる。

千葉県木更津市にあるサステナブルファーム&パーク「KURKKU FIELDS」（クルックフィールズ）内に、中村拓志（NAP 建築設計事務所）氏の設計による新たな施設「地中図書館」がオープンします。KURKKU FIELDS は「育てる・作る・食べる・循環する」といった“ひとが本質的に生きる心地よさと喜び”を感じていただく場所を目指し、約 30ha という広大な土地を 10 年前からゆっくりとすこしずつ育ててきました。昨年秋には宿泊施設”創る暮らしを体感する villa”「cocoon」がオープンし、自然と生物と人の営みにまた新たなかたちが生まれています。

春夏秋冬の光や風を感じ、農作物を育て、生き物と触れ合う場所、KURKKU FIELDS。都市部の生活からすると、命の手触りを感じ、自然をリアルに体験できる「非日常」の場所です。「非日常」の開放感を存分に享受する時の供として、また、ここでの体験を、想像力の働きや、深い思考へとつなげるものとして、KURKKU FIELDS は立ち上げ当初から本を重要視し、この場所にあった本との向き合い方を考えてきました。

このたび新たにオープンする「地中図書館」は、その名の通り、木や草花が生い茂る土の下に、ひっそりと隠されたように存在します。すり鉢状の特徴的な形をした土地の中腹に、大地にそびえ立つのではなく、洞窟のように横たわる空間。ここを訪れる人々は、KURKKU FIELDS をさまよう中で、突如、大地の中へと滑り込む入口を見つけ、思いがけない空間と本たちに出会うこととなります。

土の中の微生物と共生して植物や野菜が成長するように、地中に潜り込んで本と出会い、知を蓄え想像する力を養う。再び大地を踏みしめ、未来へと進むために。



設計について

晴れた日には畑を耕し、雨の日には読書をする。「地中図書館」はそんな人のために構想された。

平坦で乾いた敷地は、建設残土で埋め立てられた谷の上にあった。そこで我々は、ここを緑豊かな谷地に戻すこと、そして建築は作土層を占有するのではなく、植物と土中微生物達の繁栄の下に慎ましく存在すべきだと考えた。大地はあらゆる生命の源、母性の象徴として捉えられてきた。谷筋の小さな割け目の奥にヴォイドを設けることで、耕す人の休息にふさわしい、やすらかな居場所を作りたいと考えたのである。大地の下は洞窟のような空間で、本棚が取り囲む。梁や柱といった建築的要素を排し、外周部の土留め壁と袖壁から RC ボイドスラブを片持ちで跳ねだしている。内部の天井高は大地の傾斜に応じて決まるため、子どもの背の高さに合った天井の低い場所や、袖壁の間に小さな隠れ部屋が生まれた。

床と壁、天井は土仕上げでなめらかに繋がり、スラブ小口の鉛直面まで植え込まれた芝がモサモサと下垂し、空間に湿り気を与えている。これは灌水と保水のバランスを季節によって調整可能なディテールとなっている。最深部には、読み聞かせのためのホールがある。ここは、未来のために育む場をイメージした。芝の大地を大きく孕ませた子宮的空間には、階段状の席を本棚の壁が取り囲み、農園で働く人たちの蔵書や子どものための本が並ぶ。本棚の 40mm 厚の縦棧は、そのまま頭上に伸びて空間を支えている。細い縦棧は隣を支え、その縦棧はさらに隣に支えられることを繰り返すと、一周してはじめて大きな空間が支えられる。相互扶助の連鎖の先に、強い個人だけでは到底成し得ない社会的空間が立ち上がるのだ。このクルックフィールドズの農村の共同体を象徴する架構中央のトップライトには、青い空と雲に包まれた地球のような像が光を放つ。大地と人間の叡智に包まれながら、地球を想う図書館である。



ひょっこりと現れる入り口



オープン時は約 3000 冊が並ぶ（最大収容可能数は 8000 冊）。自然や農的な暮らしに関するものを中心に、詩、哲学、歴史、宗教、科学や経済にも独自の広がりやつながりが感じられる選書に。本棚の間を抜けると天井から優しい光が差し込むホールが現れる（前ページ写真）。



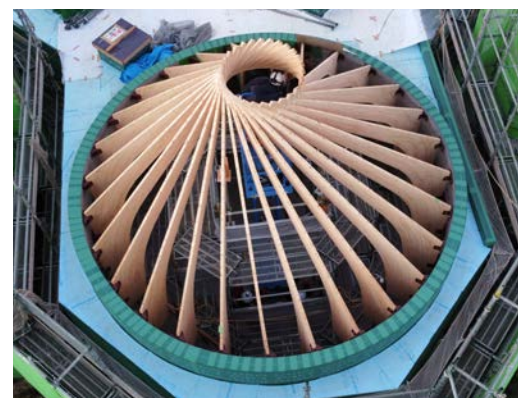
白いラウンドテーブルとソファの小部屋。カーテンを閉めて照明を消すと、天井の直径 15 ミリのトップライトがピンホール効果を作り出し、テーブルと本の上を雲の流れが通り過ぎていく。大地の下から空へとつながる部屋。



ときおり空を見上げて天気を読み、自然と人の営みを想う書斎。



ホール側から入り口を見る。その先には KURKKU FIELDS の中心であるマザーポンドをのぞむ。



最奥部のホールの施工中の様子。レシプロカル構造を採用。プレカットした複雑な部材を全て組み終えることで最終的に構造として成立させている。外部から取り入れた空気を開閉式のトップライトから外へ送り出す、自然重力換気のエコシステムを持つ。

OUTLINE

【名称】 地中図書館

【所在地】 千葉県木更津市矢那 2503 KURKKU FIELDS

【オープン日】 2023年2月16日(木)

【開館時間】 12:00 - 17:00

【休館日】 火、水

【入館方法】 事前予約制 (KURKKU FIELDS 会員限定)、入館料無料

予約：2/9(木)10:00 予約開始予定

【蔵書数】 約 3,000 冊 (オープン時)

設計：中村 拓志

1974年東京生まれ。1999年明治大学大学院で建築学修士を修めた後、隈研吾建築都市設計事務所を経て2002年NAP建築設計事務所設立。自然現象や人々のふるまい、心の動きに寄りそう「微視的設計」による、「建築・自然・身体」の有機的關係の構築を信条としている。受賞歴に日本建築学会賞、ARCASIA Awards for Architecture、JCDデザインアワード2006、2013、2014大賞ほか。

企画・選書：川上 洋平

選書家、本の魅力を深く見つめることから、人と本の出会いをつくる「book pick orchestra」代表。オリジナル商品「文庫本葉書」やひとりひとり話を聞きながら即興で本を選ぶ「SAKE TO BOOKS」など、選書に留まらず、さまざまな場所で人が本と出会う体験をデザイン・企画している。近年はルクア1100でのポップアップイベント「選書屋さん」、京都岡崎蔦屋書店とのオンライン読書会「ほんとのななし」、高松の予約制ライブラリー「kotelo」ディレクションなど。

プロデューサー：小林 武史

音楽家。日本を代表する音楽プロデューサーであり、持続可能な社会に向けた活動を行う非営利団体 <ap bank> の設立や、そのコンセプトの実践の場として <kurkku> を立ち上げるなど、サステナブルな社会への取り組みにいち早く先鞭をつけてきたプロデューサー。

KURKKU FIELDS(クルックフィールズ)について

2010年千葉県木更津市に「農業生産法人耕す(以下「耕す」)」を設立し「耕す木更津農場」を開場、約9万坪(30ha)の広大な土地からなる農場は「次の世代にも使い続けられる農地」を目指して有機野菜の栽培と平飼い養鶏を10年以上続けてきました。2019年、30haの広大な「耕す」農場を舞台に、クルックとして培ってきた消費や食のあり方を「農業」「食」「アート」の3つのコンテンツを軸に提案する、サステナブルファーム&パーク「KURKKU FIELDS(クルックフィールズ)」として2019年11月2日(土)にオープン。2022年11月には第2期オープンとして“創る暮らしを体感する villa”「cocoon」や「地中図書館」など新たな施設が加わり、魅力溢れるコンテンツや体験を提供。

<https://kurkkufields.jp>

photo: Kohei Omachi, Yuka Yanazume

お問合せ

本件に関するご質問、取材やお写真のお貸出し、掲載等に関するお問い合わせは下記までご連絡下さい。

■ GENERAL CONTACT

KURKKU FIELDS | 広報担当：小林真理
info@kurkku.jp (総合案内)

■ PRESS CONTACT

daily press | 竹形・川村 | 03-6416-3201 | 090-1531-6268
naotakegata@dailypress.org